



TITLE:

支那の星座

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 支那の星座. 天界 1939, 19(221): 185-190

ISSUE DATE:

1939-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167858>

RIGHT:

支那の星座

山 本 生

毎年見える星の空は世界の何所から見ても同じもののなのですが、バビロニア乃至ギリシヤ以來の所謂「西洋」の天文家たちは世間衆知の星座を澤山考察しましたのに對し、支那を中心とした「東洋」の天文家たちは、全く別種の星座を亦夥しく發案しました。

西洋の星座と東洋の星座と比べて、發見する多くの違ひのうち、最も目につくことは、星座各個の名稱と其の配列、乃至、其れ等の組織です。西洋の星座は、實に幼稚で、無秩序で、單に主な星々を隣り近所相互に結んで、ほゞ其の形により、動物や人物、器物等の名を附けたに過ぎません。中にはかのセンタウルや、磨羯などといふえたいの知れないものがあつたりして、今の吾々から見ると、甚だ不まじめなものであるといふ感じさへあります。之れに反して、支那の星座は、全體にわたる配列が整然とした統制を保ち、一種嚴肅な感じを

仰ぎ見る人に與へます。

古代支那の人々が考へた天空は、其のまゝ、實に雄大なる王國でありまして、王あり、妃あり、師傅あり、大臣あり、將軍あり、政廳あり、市場あり、王道あり、聖獸ありといふわけで、誠に見事な構へであります。従つて、およそ星座として吾人に與へる印象は、西洋は西洋流、支那は支那流に、極めて深い興味をそゝるものであります。

星座に關する限り、吾々日本人として、西洋流の星座にのみ親しみ、東洋古來の星座を知らずに済ますといふ理由は毫も無いのです。只、申しわけの、一應今までの由來を言へば、明治維新の日本の社會の空氣は、東洋自發の文化を一切無條件に棄て、全然白紙の態度で西洋の文化を受け入れることに急であつたため、この興味深い、西洋のものに比べて決して劣りのしない東洋發案の星空の傳統を學ぶ餘裕を、今まで有たなかつたわけです。しかし、本當の趣味として星の美を味はう立場に立てば、一體、吾々東洋人が東洋の星座を見向

きもしないで、ひたすら西洋の星座のみに親しむといふことは、滑稽な話してあるばかりでなく、過去二千餘年間に獨自の發達をした此等の東洋の星座の生みの親たる先輩たちに對して誠にすまない氣がします。

しかし幸ひにして最近年、東亞の新秩序建設に向つて、吾々東洋人は一致協同の實を體現すべき時機に際會しつゝあるのでありますから、天文趣味者としては、義務としても茲に新しく東洋の星座認識のために一大努力の覺悟を以つて、勉強しなければなりません。少なくとも、大阪や東京のプラネタリウムなどには、世に率先して、東洋の三百星座を現はし、傳來の古典を新しく生かす工夫があつて然るべきものと思ひます。

言ふまでもなく、「牽牛」や、「織女」や、「北斗」や、「南斗」、「天狼」、「老人」などといふ名は、既に東洋流のものとして、「黃道」、「赤道」、「白道」、「極」等の言葉と共に可なり社會一般にひろく普及してゐますし、かの二十八宿のうちの若干の星宿の名も、文雅人の一部には知られてゐます。尤も、彼等が必ずし

も名と共に、其れ等が意味する星々を一通り知つてゐると思はれません。尚ほ、坊間にうたはれてゐる支那兵の「青龍刀」だとか、日清戦役中の平壤城に有名だつた「玄武門」だとか、京都市中に今もある「朱雀通り」だとか、明治維新に勇名を馳せた「白虎隊」、東海に注ぐ「天龍川」など、皆、東洋流の天空星象に關係が深い名であることを考へて見ますと、實際、吾々の足元に、殆んど常識的に親しまれてゐる事柄の中から、ずいぶん夥しい天文關係の名稱を發見するのでして、『どうして今まで此れ等のことを知らずに済ましてゐたか!!』と、吾れながら不用意であつたことに氣のつく場合が多いのです。私は、今日の如き機會に、讀者諸氏が大きい期待を以つて支那の星座に關する知識を熱心に修得せられんことを奨めると共に、自身も亦一層の努力を以つて此の方面の學習と、紹介のために勉めたいと思ひます。本誌も、勿論、今後大に、東洋天文學の普及のため、特に星座の新しい趣味を世間に擴めるため、記事や圖版を増したいと思ふ次第である。